



7:30 >>
松本方面のホームへ。
みんな眠そう。



8:10 >>
駅から学校へ。この日は朝から雨がパラつく。
「部活できるかなあ」。



9:10 >>
2週間後に控える
修学旅行の打ち
合わせ。行き先は
...グアム!



17:30 >>
ただ今、部活の真っ最中。
校舎から声援。「がんばれ〜」。



19:00 >>
帰りは他校に通う中学の同級生と合流。
同級生は不審なカメラマンをジロリ。
ミヤコさん爆笑。

高校進学

中学3年になり、周りの友だちが進路を決めていく中で、ミヤコさんも高校を受験することを決意した。

「小学校、中学校ときたんだから、ここまで来たら高校まで行かないとダメだ」と、

中学を卒業したら、帰国を勧められるものと思っていたが、両親も「最後はミヤコ自身が決めることだ」と納得してくれた。

高校の入学式では、喜びと同時に「本当にきちゃった」と、自分の行動力に驚いていた。

高校でも友だちに恵まれた。

クラブ活動では、硬式テニス部に所属した。部員はミヤコさんも含め2人。同じクラスで後ろの席に座っていた百瀬さんに一緒にやろうと誘われた。今は来春のインターハイ地区予選に向け、毎日2時間の練習を2人で励んでいる。目標は県大会出場だ。

勉強は苦手な科目もあるが、中学の時には分からなかった国語の問題が、最近、分かるようになってきた。

分かる喜びとは、こんなことをいうのかもしれないと思った。

さよなら日本

そして、もう一つ変化が起きた。

今年の夏、家族で中房川に遊びに行った時のこと。ミヤコさんはお父さんに自分の進路について話した。

「高校を卒業したら、ブラジルに行くってみようと思う」。

自分のルートである母国をもっと深く知りたいと思った。

「ミヤコの口からその言葉を聞けるとは思わなかった」とお父さん。視野が広がることで、ミヤコさんの可能性も広がると考えている。

ミヤコさんは、日本とブラジル、どちらが好きかと聞かれれば、うまく答えることができない。

「それをはっきりさせると、傷つく人もいると思うから。この先も一生、選ばないと思う」。

ブラジルに行ったら1年間、母国語の勉強をして、母国の大学を受験しようと思っている。そして、今よりもっと成長して、日本のみんなに再会したい——。それが今の目標だ。

3年前、家族でブラジルに行った時、手にしたのは往復の航空券だった。けれど、高校卒業後に手にするチケットは、片道にしようと考えている。

Educação

外国籍児童生徒と公教育

市の小中学校には80人ほどの外国人児童生徒が在学しています。その内、日本語の指導を必要とする子どもは30人います。そして、その受け入れについては、日本語の習熟度の違いや国籍の多様化などで苦慮している面もあります。

また、県内に住む外国籍の子どもの33%が小中学校に通っていないという統計があります。

外国籍の人に就学の義務はありませんが、滞在が長期化すれば、未就学による教育の差が社会的な底辺化を進めかねません。

明北小学校で講師を務める市外国人相談員・平川千夏は「行政だけでなく、親側の努力も必要」と話します。仕事の事情で学校と接点が少ないなど、不利な条件が重なれば、満足のないような教育が難しくなります。

課題は複雑ですが、それぞれの立場から考えていく必要があります。



平川 千夏 (ひらかわ・ちな)
明科総合支所勤務 外国人生活相談員



まな娘2人に囲まれて。中央が父のマサノリさん。右が妹のミドリさん。